るは。大手の一の木戸。云甲斐なく責破られつる間二の木戸に支て數刻相戰ひ候する所に。御所中の御酒宴の聲冷じく聞へ候つるに付て參て候。敵已にかさに取上て。御方の氣の勞れ候ぬれば。此城にて功を立ん事。今は叶はじと覺へ候。未敵の勢を外所へ廻し候はぬ先に。一方より打破て。一先落て御覺有べしと存候。但し跡に殘り留て戰兵無ば御所の落させ給ふ者ありと心得て。敵何所く迄も續て追懸進せんと覺へ候へば。恐ある事にて候へ共。召れて候錦の御鎧直垂と。御物の具とを下し給て。御諱の字を犯して。敵を欺き。御命に代り進せんと申ければ。宮爭でか去事有べき。死なば一所にてこそ。兎も角もあらめと仰られけるを。義光言ばを荒らかにして。斯る淺猿き御事や候。漢の高祖榮陽に圍まれし時。紀信高祖の眞似をして。楚を欺かんと乞しをば。高祖是を許し給ひ候ハずや。是程に云甲斐なき御所存にて。天下の大事を。思召立ける事こそうたてけれ。はや其御物の具を脫せ給ひ候へと申て。御鎧の上帶を解奉れば。宮實もとや思召けん。御物の具鎧直垂まで脫替さも給ひて我若生たらば。汝が後生を吊ふべし。共に敵の手にかゝらば。冥途迄も同じ岐に伴ふべしと仰られて。御涙を流させ給ひながも。勝手の明神の御前を南へ向て落させ給へば。義光は。二の木戸の高櫓に上り。遙に見送り奉りて。宮の御後影の幽に隔らせ給ひぬるを見て。今はかうど思ひければ。櫓の小間の板を切落して。身をあらはにして。大音聲を

揚て名乘けるは天照大神の御子孫神武天皇より九十五代帝後醍醐天皇第二の皇子。一品兵部卿親王尊仁逆臣の爲に亡され。恨を泉下に報せん爲に。只今自害する有樣見置て。汝等が武運忽ちに盡て。腹を切んずる時の。手本にせよと云儘に。鎧を脫て櫓より下へ投落し。錦の鎧直垂の袴計に。練貫の二重小袖を。押肩脫て。白く淸氣なる膚に。刀を突立て。左の脇より。右のそば腹迄一文字に搔切て。腸抓で櫓の板に投付。太刀を口に銜へて。うつ伏に成てゞ臥たりける。大手搦手の寄手是を見て。すはや大塔宮の御自害有ハ。我先に御首を給らんとて。四方の圍を解て一所に集る。其間に宮は引違へて。天の川へぞ落させ給ひける。南より廻りける。吉野の執行が勢五百餘騎。多年の案內者なれば。道を要りかさに廻りて。打留奉らんと取籠る。村上彥四郎義光が子息。兵衞藏人義隆は。父が自害しつる時。共に腹を切んと。二の木戸の櫓の下迄馳來りたりけるを。父大に諫て。父子の義はさる事なれ共。暫生て。宮の御先途を見果て進せよと。庭訓を殘しければ。力なく旦くの命を延て宮の御供にぞ候ける。落行道の軍。事已に急にして。討死せずば。宮落させ給はじと覺ければ。義隆只一人ふみ留りて。追てかゝる敵の。馬の諸膝薙では切居平首切ては刎落させ。九折なる細道に。五百餘騎の敵を相受て。半時計ぞ支へたる。義隆節石の如くありといへ共。其身金鐵あらざれば。敵の取卷て射ける失に。義隆已に十餘箇所の疵を

蒙りてけり。死ぬる迄も猶敵の手に懸らじとや思けん。小竹の一村有ける中へ走入て。腹掻切て死にけり。村上父子が。敵を防ぎ討死しける其間に。宮は虎口に死を御遁れ有て高野山へ落させ給ける。出羽の入道道蘊は。村上が宮の御眞似をして。腹を切たりつるを。眞實と心へて。其首を取て。京都へ上せ。六波羅の實檢にさらすに。ありもあらぬものゝ首なりと申ける。獄門に梟すまでも無くて九原の苔に埋れにけり。道蘊は。吉野の城を責落したるは專一の忠戰なれ共。大塔宮を討漏し奉りぬれば。猶安からず思て。驀て高野山へ押寄大塔に陣を取て。宮の御在所を尋求けれ共。一山の衆徒皆心を合て。宮を隱し奉りければ。數日の粉骨かひもなくて。千劔破の城へぞ向ひける

○千劔破城軍の事

千劔破の城の寄手は。前の勢八十万騎に。又赤坂の勢。吉野の勢馳加て。百万騎に餘りければ。城の四方二三里が間は。見物相摸の塲の如く打圍で。尺寸の地をも餘す充滿したり。旌旗の風に翻て靡く氣色い。秋の野の。尾花が末よりも繁く。劔戟の。日に映じて。輝ける有樣は。曉の相の枯草に布るが如くあり。大軍の近づく所にい。山勢是が爲に動き。時の聲の震ふ中には。坤軸須臾に摧けたり。此勢にも恐れずして。僅に千人に足ぬ小勢にて。誰を憑み。何をか待共おさ

に。城中に堪へて防ぎ戰ける。楠が心の程こそ不敵なれ此城東西は谷深く切て。人の上るべき樣もおし。南北い金剛山に續て。しかも峯峙たり。されば共高さ二町計にて。廻り一里に足ぬ小城なれば。何程の事か有べきと。寄手是を見侮て。初一兩日の程は。向ひ陣をも取ず。責支度をも用意せず。我先にと城の木戸口の邊迄。かづき連てゞ上りたりける。城中の者共。少しも騷がず靜まり歸て高櫓の上より。大石を投懸〳〵。楯の板を微塵に打碎て漂ふ所を。差つめ〳〵射ける間。四方の坂より轉び落。おち重つて。手を負死を致す者。一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衛門尉。軍奉行にて有ければ。手負死人の實檢をしけるに。執筆十二人。夜晝三日が間筆をも置ず注せり。扨ころ今より後は。大將の御許なくして。合戰したらんずる輩をば。却て罪科に行はるべしと觸られければ。軍勢暫く軍を止て先己が陣々をぞ搆へける。爰に赤坂の大將。金澤右馬助。大佛奥州に向て宣ひけるは前日赤坂を責落しつる事。全く士卒の高名に非ず城中の搆を推出して。水を留て候しに由て。敵程おく降參仕り候き。是を以て此城を見候に。是程纔なる山の嶺に用水有べし共覺へ候はず。又畔水おんどを。他所の山より懸べき便りも候はぬに。城中に水卓散に有げに見るは。如何樣東の山の麓に。流たる溪水を。夜々に汲かと覺て候。哀宗徒の人人一兩人に仰付られ候て。此水を汲せぬ樣に。御計ひ候へかしと申されければ。兩大將此義然る

べく覺へ候とて、名越越前守を大將として。其勢三千餘騎を差分て。水の邊に陣を取せ。城より人れ下りぬべき道々に。逆木を引てぞ待かけゝる。楠い元來勇氣智謀相兼たる者ありければ。此城を拵へける。始用水の便りを見るに。五所の秘水とて。翠通る山伏の。秘して汲水。此翠に有て滴る事一夜に五斛計なり。此水何成旱にも。ひる事なければ。形のごとく人の口中を濡さん事。相違有まじけれ共。合戰の最中は或は火屋を消ん爲。又咽の乾く事繁ければ。此水計にてゐ不足あるべしとて。大なる木を以て。水船を二三百打せて。水を湛へ置たり。又數百ヶ所作り双べたる。役所の軒に。繼樋を懸て雨降は。雫少しも餘さず。舟に受入。舟の底に赤土を沈めて。水の性を損ぜぬ樣にぞ拵へける。此水を以て縱ひ五六十日雨降ず共。堪へつべし。其中に又おどかは雨降事なからんと。了簡しける智慮の程こそ淺ちぬ。されば城よりは強に。此谷水を汲ん共。せざりけるを。水防ける兵共夜毎に機を詰て。今や〳〵と待かけゝるが。始の程こそあれ。後には次第〳〵に心懈り機緩て。此水をば汲ざりけるぞとて。用心の躰少し不沙汰にぞ成にける。楠是を見すまして。究竟の射手を揃へて。二三百人夜に紛れて城より下し。まだ東雲の明果ぬに。霞隱れより押寄水邊に攻て居たる者共。二千餘人切伏て。透間もなく切て懸りける間。名越越前守堪へ兼て。本の陣へぞ引れける。寄手數万の軍勢是を見て渡り合せんと。ひしめけ共。谷を經隔て。

尾を隔てたる道なれば。輙く馳合する兵もなし。兎角しける其間に。捨置たる旗大幕なんど取持せて。楠が勢靜に城中へぞ引入ける。其翌日城の大手に。三本唐笠の紋書たる旗と。同き紋の幕とを引て。是こそ皆なごや殿より給て候つる御旗にて候へば。御紋付て候間。他人の爲には無用に候。御内の人々是へ御入候て。召れ候へかしと云て同音にどつと笑ひければ。天下の武士共是を見て。天晴名越殿の不覺やと。口々に云はぬ者こそなかりけれ。名越一家の人々。此事を聞て。安からぬ事に思はれければ。當手の軍勢共。一人も殘らず。城の木戸を枕にして。討死をせよとぞ下知せられける。是に由て彼手の兵五千餘人思ひ切て。討共射れ共用ず。乘越〳〵城の逆木一重引破て。切岸の下迄ぞ攻たりけるされ共岸高ふして切立たれば。矢長に思へ共登得ず。只徒に城を睨み。忿を押へて息つぎゐたり。此時城の中より。切岸の上に横へて置たる。大木十計切て落し懸たりける間。將棊倒をする如く。寄手四五百人壓に討れて死にけり。是に違はんと。しどろに成つて騷ぐ所を。十方の櫓より。指落し。思ふ樣に射ける間。五千餘人の兵共。殘り少なに討れて。其日の軍は果にけり。誠に志の程は武けれ共。只仕出したる事も無て若干討れにければ。天晴恥の上の損かなと。諸人口遊い猶止ず。尋常ならぬ合戰の樣を見て。寄手も侮りにくくや思けん。今は始の樣に勇進で攻んとする者も無けり。長崎四郎左衛門尉。此有樣を見て。

此城を力責にする事い。人の討るゝ計にて。其功成難し。只取卷て食貴にせよと下知して。軍を止られければ。徒然に皆堪兼て。花の下の連歌師共を呼下し。一万句の連歌をぞ始たりける。其初日の發句をば長崎九郎左衛門尉師宣

さきかけてかつ色見せよ山櫻

としたりけるを。脇の句工藤二郎右衛門尉

嵐や花のかたきなるらん

とぞ付たりける。誠に両句共に。詞の縁巧にして。句の躰は優なれ共。御方をば花にゐし。敵を嵐に喩ければ。禁忌ありける表事哉と。後にぞ思ひ知れける。大將の下知に隨て。軍勢皆軍を止ければ。慰む方やなかりけん。或は碁双六を打て日を過し。或は百服の茶褒貶の歌合なんどを。翫夜を明す。是にこそ城中の兵は。中〳〵腦されたる心地して。心を遣方もゐかりける。少し程經て後。正成いでさらば又寄手をたばかりて。居眠さまさんとて。芥を以て。人長に人形を二三十作て。甲冑を着せ。兵杖を持せて。夜中に。城の麓に立置前に疊楯をつき並へ。其後に勝りたる兵五百を交て。夜の若々と明ける。霧の下より同時に時をどつと作る。四方の寄手時の聲を聞て。すはや城の中より打出たるは。是こそ敵の運の盡る所の死狂よとて。我先にとぞ攻合せ

ける。城の兵兼て巧たる事なれば。矢軍ちとする樣にして。大勢相近付て。人形計を木隱れに殘し置て。兵は皆次第〳〵に。城の上へ引上る。寄手人形を實の兵ぞと心へて。是を討んと相集る正成所存の如く。敵をたばかり寄て。大石を四五十。一度にばつと發す。一所に集りたる敵。三百餘人矢庭に打殺され。半死半生の者五百餘人に及べり。軍はて〳〵是を見れば。天晴大剛の者かなと覺て。一足も引ざりつる兵。皆人にはあらで。藁にて作れる人形なり。是を討んと相集て石に打れ。矢に當て死せるも高名ならず。又是を危て進み得ざりつるも臆病の程顯れて云甲斐ゐし。只兎にも角にも万人の物笑ひとぞ成にける。是より後は彌合戰を止ける間。諸國の軍勢只徒に。城を守り上てゐたる計にて。するわざ一つもなかりけり。爰に何なる者か讀たりけん。一首の古歌を翻案して。大將の陣の前にぞ立たりける

餘所にのみ見てや止ぬん葛城の高きの山の嶺の楠

軍もなくて。そゞろに向ひゐたる徒然に。諸大將の陣々に。江口神崎の傾城共を呼寄て。樣々の遊をさせられける。名越遠江の入道と。同兵庫助とは。伯叔甥にて御座けるが。共に一方の大將にて。責口近く陣を取。役所を並てぞ御座ける。或時遊君の前にて。双六を打れけるが賽の目を論たて。聊詞の違ひけるにや。伯叔甥二人突違へてぞ死れける。兩人の郎從共。何の意趣も無に。

差違へ〳〵。片時が間に。死る者二百餘人に及べり。城の中より是をみて。十善の君に敵をなし奉る。天罰に由て。自滅する人々の有樣見よとぞ笑ひける。誠に是徒事に非ず。天魔波旬の所行かと覺へて。淺猿かりし珍事なり。同三月四日關東より飛脚到來して。軍を止て。徒に日を送る事然る可らずと下知せられければ。宗徒の大將達評定有て。御方の向ひ陣と。敵の城との際に。高く切立たる堀に。橋を渡して。城へ打入んとぞ巧まれる。是が爲に京都より番匠を五百餘人召下五六八九寸の材木を集て。廣さ一丈五尺。長さ廿丈餘りに梯をぞ作らせける。梯已に作り出しければ。大繩を二三千筋付て。車を以て卷立て。城の切岸の上へぞ倒し懸たりける。魯般が雲の梯も。斯やと覺て巧あり。頓て早り雄の兵共。五六千人橋の上を渡り。我先にと前だり。あはや此城只今打落されぬとみへたる所に。楠兼て用意やしたりけん。投松明の先に火を付て橋の上に薪を積るが如くに投集て。水彈を以て。油を瀧の流るゝ樣に懸たる間。火橋桁に燃付て溪風炎を吹布たり。怨に渡り懸りたる兵共。前へ進んとすれば。猛火盛に燃て身を焦す。歸らんとすれば後陣の大勢。前の難義をもいはず支たり。そばへ飛をりんとすれば。谷深く巖聳て肝を冷し。如何せんと身を揉で押あふ程に。橋桁中より燃折て谷底へどうと落ければ。數千の兵同時に。猛火の中へ落重て一人も殘らず。燒死にけり。其有樣偏に八大地獄の罪人の。刀山劒樹

につらぬかれ。猛火鐵湯に身を焦すらんも。斯やと思ひ知れたり。去程に吉野。十津川。宇多内郡の野伏共。大塔宮の命を含で。相集る事七千餘人。此の峯。彼の谷に立隱れて。千劍破の寄手共の往來の道を差塞ぐ。これに由て諸國の兵の。兵粮忽ちに盡て。人馬共に疲れければ。轉漕に叡へ兼て。百騎二百騎。引て歸る處を。案内者の野伏共。所々の迫り〳〵に待受て。討留ける間。日々夜々に討るゝ者數を知ず。希有にして命計を助るか者は。馬物の具を捨。衣裳を剝取れて裸なれば。或は破たる簑を身に纏て。虜計を隱し。或は草の葉を腰に卷て恥を顯はせり。落人共毎日に引もきらず十方へ逃散。前代未聞の恥辱なり。されば日本國の武士共の。重代したる物の具。太刀刀は。皆此時に至て失にけり。名越遠江入道。同兵庫助二人。詮なき口論して。共に死給ぬ。其外の軍勢共。親は討るれば子は髻を切てうせ。主疵を蒙れば。郎從助て引歸す間。始は八十万騎と聞へしか共。今は纔に十万餘騎に成にけり

○新田義貞に綸旨を賜事

上野國の住人。新田小太郎義貞と申は。八幡太郎義家。十七代の後胤。源家嫡流の名家あり。然れ共。平氏世を執て。四海皆威に服する折節なれば。力あく關東の催促に從て。金剛山の攝手へぞ向はれける。爰にいか成所存か出來にけん。或時執事船田入道義昌を近付て宣ひけるは。古

へより源平兩家朝家に仕へて。平氏世を亂る時は。源家是を鎮め。源氏上を犯す日は。平家是を治む。義貞不肖なりといへ共。當家の門楯として。譜代弓箭の名を汚せり。然るに今。相摸入道の行跡を見るに。滅亡遠きに非ず。我本國に歸て義兵を擧先朝の宸襟を休め奉らんと存るが。勅命を蒙らでは叶ふまじ。如何して大塔宮の令旨を給て。此素懷を達すべしと問給ひければ。船田入道畏て。大塔宮は此邊の山中に。忍びて御座候なれば。義昌方便を廻して。急で令旨を申出し候べしと。事安げに領掌申て。己が役所へぞ歸りける。其翌日。船田己が若黨を卅餘人。野伏の質に出立せて。夜中に葛城の峯へ上せ。我身は落行勢のまねをして。朝まだきの霧隱れに。追つ返しつ。半時計同士軍をぞ玄たりける。宇田内郡の野伏共是を見て。御方の野伏ぞと心得力を合せん爲に。他所の峯よりおり合て。近付たりける所を船田が勢の中に取籠て。十一人迄生捕てけり。船田此生捕共を解許して。潛に申けるは今汝等をたばかり。搦取たる事全く誅せん爲に非ず。新田殿本國へ歸て。御旗を擧んとし給ふが。令旨なくては叶ふまじければ。汝等に大塔宮の御座所を。尋問ん爲に召捕つるなり。命惜くば案内者して。此方の使をつれて。宮の御座あんなる所へ參れと申ければ。野伏共大に悅て。其御意にて候いゝ。最安かるべき事にて候此中に一人暫しの暇を給り候へ。令旨を申出して進せ候はんと申て。殘り十人をば留置。一人宮の御方

へとてぞ參りける。今やくと相待所に。一日有て令旨を捧て來れり。開て是を見るに。令旨にはあらで。綸旨の文章にかゝれたり。其詞に云

被綸言稱敷化理万國者明君德也撥亂鎭四海者武臣節也頃年之際高時法師一類蔑如朝憲恣振逆威積惡之至天誅已顯焉爰爲休累年之宸襟將起一擧之義兵叡感尤深抽賞何淺早運關東征伐策可致天下靜謐之功者綸旨如此仍執達如件

元弘三年二月十一日　　左少將

新田小太郎殿

綸旨の文章家の眉目に備つべき綸言なれば。義貞斜あらず悅で。其翌日より虛病して。急ぎ本國へぞ下られける。宗徒の軍をも玄つべき勢共は。兎に角くに事を寄て。國々へ歸りぬ。兵糧運送の道絶て。千劔破の寄手。以の外に氣を失へる由聞へければ。又六波羅より。宇都宮をぞ下されける紀清兩黨千餘騎。寄手に加はつて。未だ氣を屈せざる荒手なれば頓て城の堀の際迄責ふて。

夜晝少しも引退かず。十餘日迄ぞ責たりける。此時にぞ堀の際なる鹿垣逆木皆引破られて。城も少し防禦たる躰にぞ見たりける。されば共紀清兩黨の者とても。斑足王の身重からざれば。天を翔りがたし。龍伯公が力を得されば。山をも擘難し。餘りに詮方やおかりけん。面なる兵には軍をさせて。後なる者は手々に鋤鍬を以て。山を堀倒さんとぞ企てける。げにも大手の櫓をば。夜晝三日が間に。念おく堀崩してけり。諸人是を見て。只始より軍を止て堀べかりける物をと後悔して我も〳〵と堀けれども。廻り一里は餘れる大山なれば左右なく堀たをさるべしとは見へざりけり

○赤松蜂起の事

去程に楠が城つよくして京都は無勢なりと聞へしかば。赤松二郎入道圓心。播磨國の苦縄の城より打て出。山陽山陰両の道を差塞ぎ。山の里梨が原の間に陣を取。爰に備前備中備後安藝周防の勢共。六波羅の催促に依て。上洛しけるが。三石の宿に打集て山の里の勢を追拂て通らんとしけるを。赤松筑前守。舟坂山に支て。宗徒の敵廿餘人を生捕てけり。然れ共赤松是を誅せずして情深く相交りける間。伊東大和二郎其恩を感じて忽に武家與力の志を變じて。官軍合躰の思をなしければ。先己が館の上おる。三石山に城廓を搆へ。頓て熊山へ取上りて義兵を揚たるに。

備前の守護。加治の源二郎左衛門一戰に利を失て兒島をさして落て行く。是より西國の道彌塞て。中國の動乱斜おらず。西國より上洛する勢をば伊東に支させて後は思も無りければ。赤松嚮て高田兵庫助が城を責落して。片時も足を休めず。山陽道を指して責上る。路次の軍勢馳加て。程なく七千餘騎に成にけり。此勢にて六波羅を責落さん事は。案の内なれ共。若戰ひ利を失ふ事あらば。引退て。暫く人馬をも休めん爲に。兵庫の北に當て。摩耶と云山寺の有けるに。先城廓を搆て。敵を二十里が間につゞめたり

○河野謀叛の事

六波羅には。一方の討手にはと憑まれける。宇都宮は。千劍破の城へ向ひつ。西國の勢は。伊東に支へられて上りおず。今は四國の勢を。摩耶勢へは向ふべしと。評定せられける處に。後の二月四日。伊豫國より早馬を立て。土居の二郎。得能彌三郎宮方に成て。旗をあげ。當國の勢を相付て土佐國へ打越所に。去月十二日。長門の探題上野介時直兵船三百餘艘にて當國へ押渡り。星が岡にして合戰を致す處に。長門周防の勢。一戰に討負て。手負死人其數を知ず剩へ時直父子行方を知ずと云々。其より後四國の勢悉く土居得能に屬する間其勢既に六千餘騎。宇多津。今張の湊に船を揃へ。只今實上らんと企候なり。御用心有べしとぞ告たりける

○先帝船上へ臨幸の事

畿内の軍いまだ靜まらざるに。又四國西國日を迫て亂れければ。人の心皆薄氷を履で國の危き事。深淵に臨むがごとし。抑今かくの如く。天下の亂るゝ事は。偏に先帝の寵襟より事興れり。若逆徒差違ふて。奪取奉らんとする事もこそあれ。相搆て能々警固仕るべしと隱岐判官が方へ下知せられければ。判官近國の地頭御家人を催して。日番夜廻り隙もなく宮門を閉て警固し奉る。閏二月下旬は。佐々木富士名判官が番にて。中門の警固にて候けるが。如何思けん。哀此君を取奉て。謀叛を起さばやと思ふ心ぞ付にける。されば共申入べき便りもなくて。案じ煩ひける所に。或夜御前より。官女を以て。御盃を下されたり。判官是を給てよき便りなりと思ければ。潛に彼官女を以て申入けるは。上樣には未知し召れ候いかや。楠兵衛正成。金剛山に城を搆て猶籠り候し處に。東國勢百万餘騎にて上洛し。去ぬる二月の初より責戰ひ候といへ共。城は强ふして。寄手既に引色に成て候。又備前には。伊東大和二郎。三石と申所に城を搆て。山陽道を差塞ぎ候。播磨にハ赤松入道圓心宮の令旨を給つて。攝津國まで責上り。兵庫の北。摩耶と申所に陣を取て候。其勢已に三千餘騎。京を縮め。地を略して勢ひ近國に振ひ候なり。四國には。河野の一族に。土居二郎。得能彌三郎。御方に參て旗を揚候處に。長門の探題。上野介時直彼に打負て。行方をしらず

落行候し後。四國の勢悉く。土居得能に屬し候間。既に大船を揃へて。是へ御迎ひに參るべし共聞へ候。又先京都を責べし共披露す。御壁逆ひらかるべき時。已に至りぬとこそ覺て候へ。義綱が當番の間に。忍びやかに御出候て千波の湊より御舟に召れ。出雲者伯の間。何れの浦へも。風に任て御船を寄られさりぬべからんする武士を。御憑候て。暫く御待候へ。義綱恐れおがら。責進せん爲に罷向ふ躰にて。聽て御方に參り候べしとぞ奏し申ける。官女此由申入ければ。主上猶も彼僞りてや。申らんと思召れける間。義綱が志の程を能々伺御覽んぜられん爲に。彼官女を。義綱にぞ下されける。判官は面目身に餘りて覺へける上最愛又甚しかりければ。彌忠烈の志をぞ顯しける。さらば汝先。出雲國へ越て。同心すべき一族を語ひて。御迎ひに進れと仰下されける程に。義綱則出雲へ渡て。鹽冶判官を語ふに。鹽冶いかゞ思けん義綱を追籠置て。隱岐の國へ返さず。主上且くは。義綱を御待有けるが。餘りに事遲りければ。只運に任て御出有んと思召て。或夜の宵の紛れに。三位殿の御局の。御產の事近付たり迎御所を御出有よしにて。主上其御輿に召れ。六條少將忠明朝臣計を召具して。潛に御所をぞ御出有ける。此躰にては。人の怪め申べき上。駕輿丁もなかりければ。御輿をば止られて。忝も十善の大子自ら玉趾を草鞋の塵に汚して。自ら泥土の地を蹈せ給けるこそ淺猿けれ。此は三月廿三日の事なれば。月待程の間さ

夜に。ろこ共知らず遠き野の。道をたどりて歩せ給へば。今は遙に來ぬらんと思召れたれば。跡なる山は。未流の響の風に聞ゆる程なり。若追懸進する事もや有らんと恐しく思召ければ。一足も先へと。御心計は進め共。いつ習はせ給ふべき道おらねば。夢路をたどる心地して。只一所にのみ休はせ給へば。こは如何せんと思ひ煩ひて。忠顯朝臣。御手を引御腰を推て。今夜いかにもして。湊の邊迄と。心を遣給へ共。心身共に疲れ終て。野徑の露に徘徊す。夜甚く深にければ。里遠からぬ鐘の聲の。月に和して聞へけるを。道しるべに尋ね寄て。忠顯朝臣。或家の門を叩き。千波の湊へは。何方へ行ぞと問ければ。内より怪げなる男一人出向て。主上の御有樣を見參らせけるが。心おき田夫野人なれ共。何とおく痛敷や思ひ進せけん。千波の湊へは。是より纔五十町計候へ共。道南北へ分て。如何樣御迷候ぬと存候へば。御道しるべ仕り候はんと申て。主上を輕輕と負進せ。程おく千波の湊へぞ着にける。爰にて時打鼓の聲を聞ば。夜は未五更の初おり。此道の案内者仕たる男甲斐〳〵敷港中を走廻て伯耆國へ漕戻る商人船の有けるを。兎角語ひて。主上を屋形の内に乘進せ。其後暇申てぞ止りける。此男誠に。直人に非ざりけるにや。君御一統の御時最忠賞有べしとて。國中を尋られけるに。我こそ其にて候へと。申者遂におかりけり。夜も已に明ければ。船人纜を解て。順風に帆を揚。湊の外に漕出す。船頭主上の御有樣を見奉て。只人にては渡らせ給はじとや思けん。屋形の前に畏て申けるは。斯樣の時。御船を仕て候こそ。我等が生涯の面目にて候へ。何くの浦へ寄よと。御定に隨ひて。御船の楫をば仕り候べしと申て。實に他事もなげ成氣色なり。忠顯朝臣是を聞給ひて。隱ては中々惡かりぬと思はれければ。此船頭を近く呼寄て。是程に推當られぬる上は。何をか隱すべき。屋形の内に御座有こそ。日本國の御主忝も十善の君にて入せ給へ。汝等も定て聞及びぬらん。去年より隱岐判官が館に。押籠られて御座有つるを。忠顯盗み出し進らせたるなり。出雲伯耆の間に。いづくにても。さりぬべからんずる泊へ急ぎ御船を着てれろし參らせよ。御連開おば。必ず汝を侍に申おして所領一所の主に成べしと仰られければ。船頭誠に嬉しげ成氣色にて。取楫面楫取合せて。片帆にかけてぞ馳たりける。今は海上二三十里も過ぬらんと思ふ所に。同じ追風に帆懸たる船。十艘計出雲伯耆をさして馳來れり。紫筑船か。商人舟かと見ればさもあらで。隱岐判官清高。主上を追奉る船にてぞ有ける。船頭是をみて。斯ては叶ひ候まじ。是に御隱れ候へと申て。主上と忠顯朝臣とを。舟底にやどし進せて。共上にあい物として干たる魚の入たる俵をとり積て。水手楫取其上に立並て櫓をぞ押たりける。去程に追手の舟一艘御座船に追付て。屋形の内に乘移り。爰かしこ搜しけれ共。見出し奉らず。扨は此船には召ざりけり。若怪き舟や通りつると問ければ。船頭今

夜の子の刻計に。千波の湊を出候つる船にこそ。京上臈かと覺しくて。冠とやらん着たる人と。立烏帽着たる人と。二人乘せ給て候つる其船今は。五六里も先立候ぬらんと申ければ。扨は疑ひも無事なり。早船を押とて。帆を引揖を直せば。此船は驚て隔りぬ。今はかうと心安く覺て。跡の波路を顧れば。又一里計さがり遣手の船百餘艘。御座船を目に懸て。鳥の飛が如くにぞ追懸たり。船頭是をみて。帆の下に櫓を立て。万里を一時に渡らんと。聲を帆に擧て推けれ共。折節風たゆみ。鹽に向ふて。御船更に進まず。水手揖取いかゞせんと。あはて騒ぎける間。主上船底より御出有て。扇の御護より。佛舎利を一粒取出させ給て。御疊紙に乘て。波の上にぞ浮られける。龍神是を納受や去たりけん。海上俄に風替りて。御座船をば東へ吹送り。追手の船をば。西へ吹もどす。さてこそ主上は虎口の難を御遁れ有て御船は時の間に。伯耆國名和湊に着にけり。六條少將忠顯朝臣一人。先船よりおり給て。此邊にい。いか成ものか弓矢取て人にしられたると問れければ。道行人立やすらひて。此邊には。名和又太郎長年と申者こそ其身さして。名有武士にては候はね共。家富一族廣うして。心かさ有者にて候へとぞ語りける。忠顯朝臣能々其子細を尋ね聞て。驚て勅使を立て仰られけるは。主上隱岐判官が館を御迎有て今此湊に御座有。長年が武勇兼て上聞に達せし間御憑有べき由を仰出さるゝ。憑まれ進せ候べしや否や。速に勅答を申べしと

ぞ仰られたりける。名和又太郎は折節一族共呼集て酒呑てゐたりけるが。此由を聞て。案じ煩ふたるけしきにて。兎も角も申得ざりけるを。舍弟小太郎左衛門尉長重進み出て申けるは。古より今に至る迄。人の望所は。名と利との二つあり。我ら忝も十善の君に憑れ進せて。尸を軍門に晒共。名を後代に殘さん事。生前の思ひ出。死後の名譽たるべし。唯一筋に思定させ給ふより。外の義有べし共存じ候ゝずと申ければ。又太郎を始として。當座に候ける一族共廿餘人。皆此義に同じてけり。さらば頓て合戰の用意候べし。定て追手も跡より馳り來らん。長重は主上の御迎に參て。直に船上山へ入進せん。旁々ゝ頓て打立てっ船上へ御參り候べしと云捨て。鎧一縮して走出ければ。一族五人腹卷取て役懸〳〵。皆高紐しめて。共に御迎ひにぞ參じける俄の事にて御輿なんども無りければ。長重着たる鎧の上に。荒薦を卷て。主上を負進せ。鳥の飛が如くして。船上へ入奉る。長年近邊の在家に人を廻し思立事有て。船上に兵粮を上る事あり。我倉の内に有所の米穀を一荷持て運ばたらん者にゝ。錢を五百宛取すべしと觸たりける間。十方より人夫五六千人出來して我劣らじと持送る。一日が中に。兵粮五千餘石運びけり。其後家中の財寶。悉々人民百姓に與へて己が館に火を懸。其勢百五十騎にて。船上に馳參り。皇居を警固仕る。長年が一族名和七郎と云ける者。武勇の謀有ければ。白布五百端有けるを旗に拵へ。松のはを燒て煙に薫。

近國の武士共の。家々の紋を書て。此の木の本。彼の墨にぞ立置ける。此旗共墨の嵐に吹れて。陣々に翻りける様。山中に大勢充滿したりと見へてをびたゞし

○船上合戰の事

去程に。同じ廿九日。隱岐判官佐々木彈正左衞門尉。其勢三千餘騎にて。南北より押寄たり。此船上と申は。北は大山に繼き峙ち。三方は地さがりに墨に懸れる白雲腰を廻れり。俄に拵へたる城なれば。末堀の一所をも塀ず。屏の一重をもぬらず。只所々に大木少々切倒して。逆木に引切舍の甍を破て。搔楯にかける計あり。寄手三千餘騎坂中迄責上て。城中をきつと向上たれば。松柏生茂て最深き木陰に。勢の多少は知ぬ共。家々の旗四五百流。雲に翻り日に映じて見へたり。扨は早近國の勢共の。悉く馳參りたりけり。此勢計にては責がたしとや思けん。寄手皆心に危て進みねず。城中の勢共は。敵に勢の分際を見へじと。木陰にぬはれ伏て。時々射手を出し。遠矢を射させて日を暮す。懸る所に。一方の寄手なりける。佐々木彈正左衞門尉。遙の麓に扣て居たりけるが。何方より射共知らぬ流矢に。右の眼を射ぬかれて。矢庭に伏て死にけり。是に由て。其手の兵五百餘騎。色を失ふて。軍をもせず。佐渡前司は八百餘騎にて。搦手に向ひたりけるが。俄に旗を卷甲を脱て。降參す。隱岐判官い。猶加様の事をも知ず。搦手の勢は。定て今

は責近付ぬらんと心得て。一の木戸口に支て荒手を入替〳〵時稀る迄ぞ責たりける。日已に西山に隱れぬんとしける時。俄に天かき曇り風吹雨降事車軸の如く。雷の鳴事山を崩が如く。寄手是に怖わなゝいて。此彼の木陰に立寄て。群居たる所に。名和又太郎長年舍弟。太郎左衞門尉長重。小次郎長生が。射手を左右に進めて。散々に射させ。敵の楯の端のゆるぐ所を得たりや賢しと拔連て打て懸る。大手の寄手十餘騎谷底へ皆まくり落されて。己が太刀長刀に貫れて命を墮すもの其數をしらず。隱岐判官計辛き命を助りて。小舟一艘に取乘。本國へ逃歸りけるを國人いつしか心替りして津々浦々を堅め防ぎける間。波に任せ風に隨て越前の敦賀へ漂ひ寄たりけるが。幾程も無して。六波羅沒落の時江州番場の辻堂にて。腹搔切て失にけり。世澆季に成ぬといへ共。天理未だ有けるにや餘りに。君を惱し奉りける。隱岐判官が。三十餘日が間に滅びはてゝ。首を軍門の幢に懸られたるこそ不思議あれ。主上隱岐國より還幸なつて。船上に御坐有と聞へしかば。國々の兵共の馳參る事引も切ず。先一番に出雲の守護鹽冶判官高貞。富士名の判官と打連て千餘騎にて馳參る其後淺山次郎八百餘騎。金持一黨三百餘騎。大山の衆徒七百餘騎。都て出雲伯耆因幡三個國の間に。弓矢に携る程の武士共の參りぬ者は無りけり。是のみならず。石見國には澤。三角の一族。安藝の國には熊谷小早川。美作國には。管家の一族。江見。芳賀。

澁谷南三郷。備後國にハ。江田廣澤。宮。三吉。備中には。新見。成合。那須三村。小坂。河村庄。眞壁。備前には。今木大宮太郎幸範。和田備後次郎範長。知間二郎親經。藤井射越五郎左衛門尉範貞。小島。中吉。美濃の權介和氣彌次郎季綱。石生彦三郎。此外四國九州の兵までも。聞傳へ〳〵。我前にと馳せ參りける間。其勢船上山に居餘りて四方の麓二三里は。木の下草の陰迄も。人あらずと云ぬ所は無りけり

訂正太平記 卷之七 終

十錢文庫

實價十錢
郵稅四錢

◀十錢の敷島は日半で煙と化す

泰西にてはあらゆる平民的の文學書を、僅かシックスペンスにて汎く讀書界に提供し上下をして等しく讀書趣味を滿足せしめつゝあり我が十錢文庫も極めて廉價なる實費販賣なり

◀十錢文庫は永久に不滅なり

殊に本書は必讀のものゝみを選み、單に文藝の書に限らず經世修養其他のものに至るまで、弘く我が讀書界に提供し、又校訂を嚴密にせるは、本文庫の特色と自信する所なり。

大正二年十二月二十日印刷
大正二年十二月廿五日發行

（實價金十錢）
（郵稅金四錢）

不許復製
十錢文庫第廿二編
訂正太平記（一）

編輯兼發行者 東京市淺草區三好町七番地 大川錠吉
印刷者 東京市淺草區南元町廿六番地 川崎清三
印刷所 同所 大川屋印刷所

發行所 東京市淺草區三好町七番地 大川屋書店
電話下谷一五七三番
振替東京四〇〇九番

賣捌店

東京
神田 東京堂 銀座 北隆館 神田 上田屋 淺草 岡村
尾張町 東海堂 日本橋 至誠堂 日本橋 文林堂 今川橋 大洋堂

全國
大阪 岡本偉業館 小川博 左文字書店 高崎
同京都 盛文館 田村書店 弘前 今村書店 前橋 小林書店
同名古屋 百架堂 山中書店 秋青 森田 成田書店 金澤戸 水川 久宇 都宮書店 樂平 書堂
同長濱 星野書店 新潟 萬松堂 石川書店 高岡 宇都宮書店 川久 樂平 書堂
久留米 菊竹書店 文泉堂 長岡 目黑書店 同 廣島 友田海書店 積善館 田中文友堂 金書堂 久永書店 清水屋書堂
函館 大盛堂 同 目黑書店 同 廣島 友田海書店 積善館 田中文友堂 金書堂 久永書店 清水屋書堂
札幌 富貴堂 同 平松 本府 柳高 張書店 正美書店 月堂 鹿兒島 熊本 城平 磐城 須賀川 南書店
小樽 川富 古 徽 横 軍 港

MADE IN JAPAN

四六判雅美洋紙上質

十錢文庫

各冊實價十錢郵税四錢

■十錢文庫既刊發賣目錄■

1 湯淺元禎輯錄常山紀談（前）
2 曲山人補綴（會入評釋）當世娘節用（全）
3 寺門靜軒著（評釋）江戸繁昌記（全）
4 靜村迂生序神皇正統記（全）
5 舊雨樓校註（萬治舊版）伊曾保物語（全）
6 柳亭種彦名著（繪入評釋）修紫田舍源氏（一）
7 曲亭馬琴名著夢想兵衛胡蝶物語（前）
8 十返舍一九名著東海道中膝栗毛（前）
9 曲亭馬琴傑作（美濃舊版お駒才三）八丈奇談（全）
10 貝原益軒著大和俗訓（全）
11 室鳩巢著鳩翁道話（全）
12 曲亭馬琴名著夢想兵衛胡蝶物語（後）
13 湯淺元禎輯錄常山奇談（後）
14 十返舍一九名著東海道中膝栗毛（後）
15 大槻誠之解訓蒙日本外史（一）
16 大槻誠之解訓蒙日本外史（二）
17 爲永春水著いろは文庫（一）
18 十返舍一九名著木曾道中膝栗毛（上）
19 伴蘗蹊著近世畸人傳（完）
20 曲亭馬琴名著旬殿實々記（完）
21 大槻誠之解訓日本外史（三）
22 大槻誠之解訓日本外史（四）
23 大槻磐溪著新譯近古史談（完）
24 十返舍一九名著木曾道中膝栗毛（下）
25 大槻誠之解訓日本外史五（完）
26 梅亭鷺叟序大岡仁政錄（全）
27 奥田壽太講心學道の話（全）
28 自笑其碩著八文字屋集（全）
29 著者不詳平家物語（上）

■以下古今名著 續々發行■

大川文庫

珍袖

製本、表紙最上、總クロース金文字入頗美本

○椿說弓張月
○佐倉義民傳
○一休禪師
○赤穗義士銘々傳
○元和三勇士
○水門黃門
○大阪夏御陣
○宮本武藏
○赤垣源藏
○大阪冬御陣
○里見八犬傳
○曾呂利新左衞門
○本能寺
○太閤記
○松平伊豆守
○相馬大作
○曾我物語
○木村長門守
○川中島
○柳川庄八
○大高源吾
○塩原多助
○大鹽平八郎
○闕ケ原軍記
○岩見武勇傳
○越後傳吉
○德川十五代記
○渡邊華山
○闕口彌太郎
○八耶鬼耶
○小栗判官
○荒木又右衞門
○更科勇婦傳
○大岡越前守
○熊澤蕃山
○塚原卜傳
○御前試合
○大石良雄
○柳生旅日記
○三國志
○源平盛衰記
○正宗孝子傳
○田宮坊太郎
○三家三勇士

口絵、アートペーパー、コロタイプ、美術印刷

本文、改正六號活字、新式平形、總振假名付

用紙、上等なる舶來紙赤門八十听

印刷、振假名などの鮮明は是に及ぶものなし

▲帶携至便
▲ポケット形
▲定價各冊廿五錢
▲郵送料各冊四錢

文學士大町桂月著

增訂 桂月書翰

洋裝定價五拾五錢　小包八錢

當時中學社會を中心點として、上下に雷名を轟かしつゝある、文豪大町桂月君が、其の日常知己朋友及び貴顯紳士の方と、とりやりしたる手紙の俤を知らんとすれば、本書に若くものなし、本書は實に文章流麗に才思湧くが如く、更に增補して社會萬般の入用の書翰は悉く網羅し、而して之れ亦高詞に流れず、卑俗に陥らず其の彩筆陸離、光燄萬丈たれば、實に錦上に百花の爛熳たるを加へたるの感あり、請ふ、滿天下の諸君、一本を購ひ得て、如何に其の趣味の津々で、且つ刻下社會各方面に向て緊切適當たる珍書たることを知り給へ。

東京市淺草區　大川屋發行　三好町七番地

◀電話下谷一五七三番◶振替東京四〇〇九番◀

勝安房君題字
海江田君題字
三好中將君題字
嘉納治五郎君序
榊原健吉君跋文
吉田千春先生
磯又右衛門先生　合著

天神眞揚流柔術極意教授圖解

四六判裝打美製
挿畫二百廿余個入
紙數二百八十余頁
全一冊
郵稅共金四十錢

270
25

岡本半溪翁先生著

草花木竹盆栽培養法

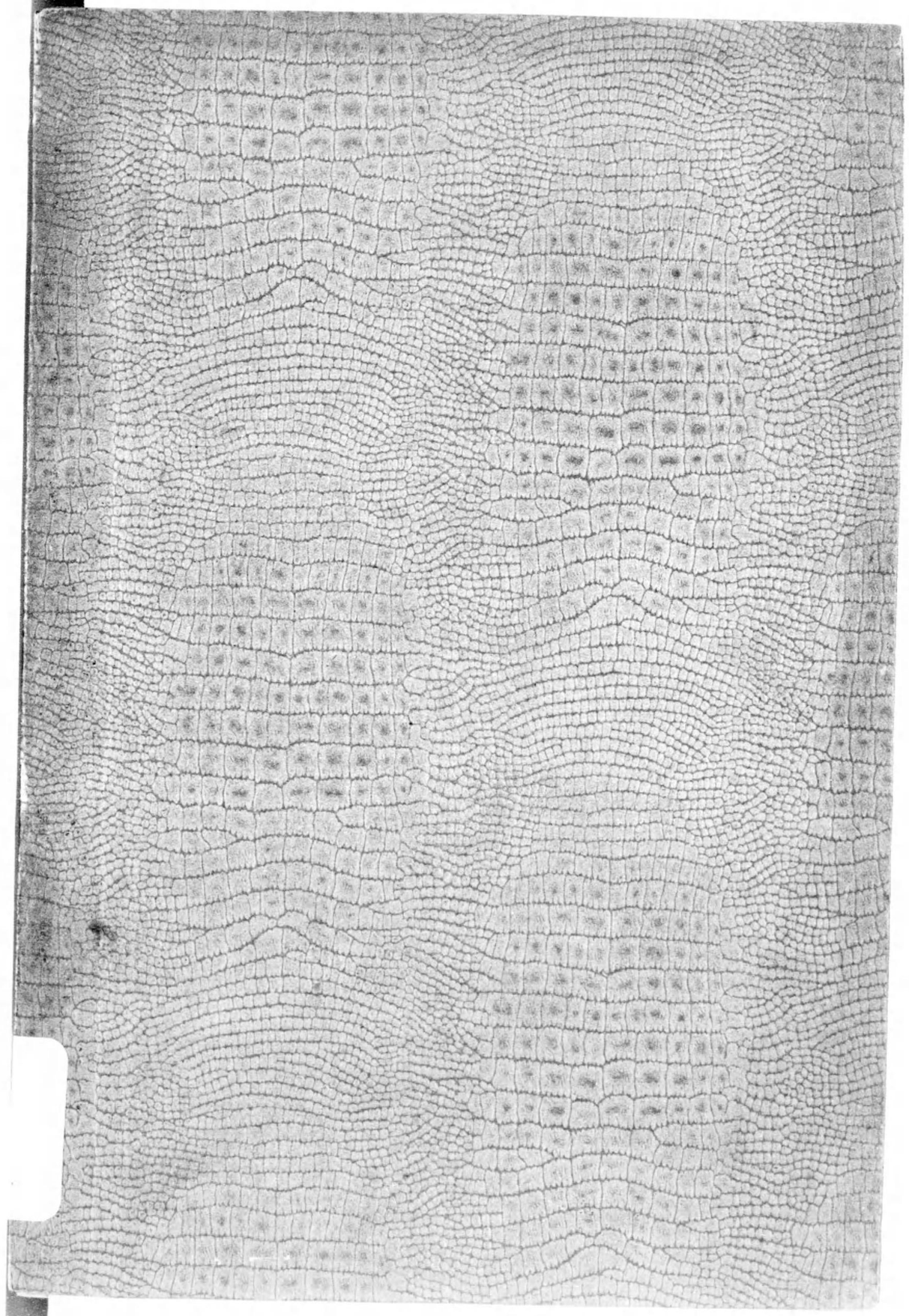
全一冊
菊判洋裝美製本
紙數百四十余頁
正價金三十錢
郵稅四錢

岡本半溪翁先生著

全一冊
菊判洋裝美製本
紙數百五十余頁
正價金三十錢
郵稅四錢

木村文法翁先生著

築山水庭作秘傳

全一冊
菊判洋裝美製本
庭園圖卅余種入
正價金三十錢
郵稅四錢

終